

防衛セミナー議事概要

- 1 日 時：平成29年7月29日（土）15：00～17：00
- 2 場 所：青森県つがる市「柏ふるさと交流センター（多目的ホール）」
- 3 講師等：防衛政策局 防衛政策課 飯島 秀俊 防衛政策企画官
内閣官房副長官補付 田中 賢二 内閣参事官
航空自衛隊 車力分屯基地司令 栗秋 健士 2等空佐
- 4 要 旨：次のとおり

【開会の辞】

（司会）

定刻となりましたので、ただ今から、防衛セミナーを開催させていただきます。

それでは、本セミナーの開会に先立ちまして、主催者であります、東北防衛局長の深澤雅貴から挨拶申し上げます。

【主催者挨拶】

（深澤局長）

皆さん、こんにちは。東北防衛局長の深澤です。本日はお忙しい中、東北防衛局の主催する防衛セミナーに沢山の方にご来場いただき、厚く御礼を申し上げます。

また本日はご来賓として、つがる市の福島市長、つがる市議会基地対策特別委員会の山本委員長、つがる市商工会の宮本会長をはじめとする多数の方々にご臨席いただき、重ねて御礼を申し上げます。

本セミナーは、防衛政策や自衛隊の活動などについて多くの国民の皆様にご理解をしていただくため、平成19年から全国の8つの地方防衛局で開催してきているものです。東北防衛局管内では、これまでに33回開催させていただいており、当地つがる市におきましては、今回が初めての開催となります。

本日の防衛セミナーにおきましては、講師として防衛省で防衛政策の企画・立案を担当する防衛政策局防衛政策課の飯島秀俊防衛政策企画官と、内閣官房で政府の緊急事態対処や危機管理を担当する内閣官房副長官補付の田中賢二内閣参事官と、ここつがる市車力地区に所在する航空自衛隊車力分屯基地の栗秋健士司令の3名をお招きしております。

飯島企画官からは北朝鮮情勢と弾道ミサイル防衛について、田中参事官からはJアラートによる弾道ミサイル情報の伝達について、栗秋司令からは航空自衛隊の概要と車力における日米連携について、それぞれご講演をいただきます。

ご案内のとおり、近年我が国を取り巻く安全保障環境は益々厳しさを増しております。特に北朝鮮は、昨年には2度の核実験のみならず、合計20発以上という過去に例を見

ない頻度で弾道ミサイルの発射を繰り返し、本年に入ってから、新型とみられるものを含め弾道ミサイルの発射を繰り返しています。昨日深夜には北朝鮮中部より弾道ミサイルが発射され、3,500kmを大きく越える高度に達し、約45分間飛行し、北海道奥尻島から約150kmの我が国の排他的経済水域内に落下したものと推定されております。この弾道ミサイルについて、詳細は分析中でありすけれども、現時点までに得られた諸情報を総合的に勘案すれば、その飛行高度・距離等を踏まえれば、最大射程が少なくとも5,500kmを越えるとみられることから、ICBM級の弾道ミサイルであると考えられ、更に脅威が増したことを明確に示したものであると考えられております。

このような中、つがる市におかれましても武力攻撃事態等における国民の保護のため、日頃から市民の皆様の安全確保に向けて積極的に取り組んでおられることと思います。本年9月1日には、平成29年度青森県総合防災訓練に併せて、弾道ミサイルを想定した地域住民等の避難訓練が実施されると承知しており、市民の皆様の防災意識の高さを感じているところでございます。

当局といたしましては、本日のセミナーを開催することによりまして、聴講される皆様方の弾道ミサイルへの対処等についてのご理解を、なお一層深めていただく一助となればと願っております。

最後になりますが、本セミナーの開催にあたり、青森県をはじめ、つがる市、つがる市商工会の皆様方から御後援を賜り、この場をお借りして衷心より感謝申し上げます。本日はよろしく願いいたします。

【来賓挨拶】

(司会)

続きまして、本セミナーの開催地でありますつがる市長の福島弘芳様からご挨拶を賜りたいと存じます。よろしく願いいたします。

(福島市長)

本日、ここつがる市で第34回防衛セミナーが開催されるにあたり、主催者である防衛省東北防衛局深澤局長をはじめ関係者の皆様にご心から御礼を申し上げます。

また、講師としてお越しになられました、防衛省飯島企画官、内閣官房田中内閣参事官、車力分屯基地栗秋司令におかれましては、ご多忙のところ、最近の我が国を巡る安全保障をテーマとしてご講演いただけるということであり、ご期待と感謝を申し上げます。

さて、現在日本を取り巻く安全保障環境が一層厳しさを増している中、本市は航空自衛隊車力分屯基地或いはXバンドレーダーが配備される米陸軍車力通信所と国防の任務を担う施設が共存する大変重要な役割を持つ地域と認識しております。

また、昨今北朝鮮による弾道ミサイルの発射が繰り返し行われるなど、市民は弾道ミサイルに対する恐怖や不安が日々強まっている状況にあります。各自治体においては、有事に備え迅速かつ的確な危機管理対応が求められており、本市においても国民保護計画に基づく武力攻撃事態などを想定した対処が必要であるとともに、住民が執るべき行動等に関し、意識啓発に努め、浸透を図っているところであります。

また、今年の9月には弾道ミサイルを想定した国民保護に関する避難訓練を実施するところであり、本日のセミナーは、大変意義深いものであります。

最後になりましたが、本日の防衛セミナーが成功裏に、そしてご来場の皆様が日本の防衛政策や防衛省・自衛隊の活動に対し、一層のご理解を深めていただく機会となりますよう祈念申し上げ祝辞とさせていただきます。今日は皆さんどうもご苦労様です。

(司会)

ありがとうございました。本日はご来賓としましてつがる市議会基地対策特別委員会委員長山本清秋様、つがる市商工会会長宮本純一様、富范町内会長成田悦雄様、豊富町会長松橋正儀様、車力基地協力会会長秋田谷要藏様をはじめ多数の皆様のご臨席をいただき、重ねて御礼を申し上げます。

【講師紹介】

それではここで、簡単ではございますが本日の講師の御三方について講演順にご紹介させていただきます。

御一方目は防衛省防衛政策局防衛政策課の飯島秀俊防衛政策企画官です。

飯島企画官は、平成7年3月に早稲田大学法学部を卒業し、平成12年5月にアメリカン大学法科大学院を修了、平成7年4月に当時の防衛庁に入庁後、平成18年8月に在米国日本大使館政務班一等書記官、平成26年3月に防衛政策局日米防衛協力課日米安全保障防衛協力企画官、平成27年10月に同局防衛政策課企画調整官、平成28年7月から現職に着任しております。

御二方目は内閣官房副長官補付の田中賢二内閣参事官です。

田中参事官は、平成7年3月に東京大学法学部を御卒業後、同年4月に運輸省に入省され、その後、平成24年3月に国土交通省大臣官房総務課企画官、平成25年7月に同省大臣官房付でロンドン大学大学院留学、平成27年7月に同省総合政策局付で内閣官房副長官補付企画官を兼ね、内閣官房総合海洋政策本部事務局企画官をされ、平成28年7月から現職に着任されております。

御三方目は航空自衛隊車力分屯基地の栗秋健士司令です。

栗秋司令は、平成3年3月に自衛隊生徒で入隊、平成11年3月に東京理科大学を卒業し、平成13年3月に幹部自衛官に任官後、平成15年1月に第2高射群福岡県久留米市に勤務し、平成23年3月に幹部学校において第59期海上自衛隊指揮幕僚課程を

修了、平成24年3月に統合幕僚監部計画課、平成26年3月に航空幕僚監部防衛課、平成28年3月から現職に着任しております。

【講演】

(司会)

それでは、講演に入らせていただきたいと思います。飯島防衛政策企画官、よろしくお願いいたします。

(飯島防衛政策企画官)

皆さんこんにちは。ただ今ご紹介いただきました防衛省防衛政策課で防衛政策全般的なことを立案・企画する部署の企画官をしております飯島です。

本日は、まさに昨日の夜もミサイル発射がありました。北朝鮮という国は今何をしようとしているのかということで、北朝鮮情勢全般のお話しをさせていただいた後、特に弾道ミサイルが、万が一我が国に飛来した場合にきちんと迎え撃つことができるよう、防衛省が今整備をしております弾道ミサイル防衛システムについてご説明をさせていただければと思います。専門用語もありますが、できるだけ分かりやすく簡単にご説明をさせていただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

まず、北朝鮮情勢の前に、先程、我が国を取り巻く安全保障環境が大変厳しくなっているというお話がありましたので、それについて簡単にご説明をさせていただければと思っております。

この図を見ていただければお分かりになるかと思いますが、我が国周辺では非常に大規模な軍事力が集中しております。例えば、陸軍兵力として中国が160万人で世界第1位、北朝鮮が102万人で世界第2位となっており、航空兵力では世界第2位が中国、3位がロシア、5位が韓国となっております。

そのような中、次の図にあるとおり、各国の国防費が増加しております。例えば、ロシアは10年間で、4.62倍になっており、また、中国も3.4倍になっているということで、GDP比で見ても、日本より遙かに国防費を使っているということです。このように、我が国の周辺では、軍事力が集中し、更に各国が国防費を増加させ、国防力を強化しているということがお分かりいただけるのではないかと思います。

その増加している国防力、強化している国防力をもって、我が国周辺ではどのようなことが行われているかということを表しているのがこちらのスライドです。

北朝鮮については後程詳しくご説明いたしますが、例えば中国では、強化した軍事力をもって、尖閣諸島や東シナ海での活動を活発化し、南シナ海で埋立てを行うなど、影響力を強めています。

また、一時期、冷戦終結後活動が低調でしたが、ロシアが最近復活傾向にあり、極東での活動、更には北方領土にも部隊を配備しているという状況です。

このように、それぞれの国が強化した軍事力を使って色々な活動をしてきているという事で、非常に緊張感が高まっており、我が国を取り巻く安全保障環境は大変厳しい状況にあるということが言えます。

その中で北朝鮮です。特になぜ北朝鮮が核・ミサイルを開発しているかということで、具体的な考え方、彼らの思想みたいなものを、まずは簡単にご説明させていただきます。

こちらは朝鮮半島の図で、ご案内のとおり南北に分断されております。朝鮮半島では、1948年に南北朝鮮間が分断して独立し、その後朝鮮戦争を迎えました。1950年から1953年にかけて朝鮮戦争が行われ、まさに一昨日の7月27日は休戦協定が結ばれた日ということで、北朝鮮はこの日を祖国開放戦争勝利記念日と位置付けております。ここでは1953年の休戦から64年間、南北合わせると150万人もの軍が対峙しているという状況です。

北朝鮮については、兵力は119万人で、大体北朝鮮の人口が2,500万人位と言われておりますので、その5%位が軍人ということになります。これは、日本で言うと、総人口の5%くらいが軍人であった1943年頃と同じ状況ということなのです。

先ほど、北朝鮮の陸上兵力は102万人とご説明しましたが、ここで一番ご理解いただきたい大きなポイントは、北朝鮮の装備は陸上兵力中心で、戦車や艦艇の数は多いのですが、装備品は非常に古いものであるということです。

こちらのT-55という戦車は、第二次世界大戦の時に使っていたような戦車で、傾いて走る戦車ですが、そういう古い戦車をたくさん持っているということ、また、艦艇も数は多いのですが、非常に小さい船ということです。他方、韓国では、海空軍を中心に近代化に努めているということもあり、日本のイージス艦のようなものや、日本のF-15Jと同様に、F-15K戦闘機を保有しております。

このような状況を前提に、今北朝鮮が何を狙っているのかということ、「並進路線」を進めているということです。

北朝鮮の装備は古く、まともに戦ったら近代的な装備を持っているアメリカや韓国には勝てません。そのため、通常の装備である艦艇や航空機を整備するのではなく、あまり費用のかからない核兵器とそれを運ぶための弾道ミサイルに集中投資をするというものです。このように国防にはあまり費用をかけずに、経済建設を同時にしていこうというのが並進路線の考え方です。こういった核武力というものに集中投資をしていくという方針を、2013年に金正恩氏が打ち出していますので、この並進路線に基づいて、最近、核実験や、更にそれを運ぶための弾道ミサイルの発射試験を行い、アメリカの核の脅威に対抗するという政策が行われているのだと考えられます。

次に北朝鮮が具体的にどのような活動をしているかについてご説明いたします。北朝鮮は様々な種類の弾道ミサイルを保有しております。例えば、射程距離が1,300kmで日本のほとんどを射程に収めているノドンというミサイルは数百発持っておりますし、ノドンより若干射程距離が短いスカッドミサイルも数百発持っています。更には、

一番射程距離が長く、アメリカの中西部まで届くのではないかとされているテポドン2派生型というミサイルも持っており、昨日発射したミサイルのように最近新型のものも開発してきているというところでは。

北朝鮮は、様々なミサイルを開発・保有し、それがどの位飛行するのかということの詳細に分析しております。それはまさに核弾頭を載せたミサイルでアメリカへの攻撃を考えているということになるかと思えます。

次のスライドは北朝鮮による過去の発射事例です。最初に日本の上空を越えたミサイルは、この1998年の8月のミサイルで、大体1,600km飛翔したのではないかとされています。その後、日本上空を越えたミサイルとしては、岩手県や秋田県を越えたものがあります。更に、人工衛星の打ち上げと北朝鮮は主張しているのですが、人工衛星と称する弾道ミサイルを、北朝鮮の西側の東倉里（トンチャンリ）というところから、フィリピンの方に向けて2012年と2016年に発射しているというところでは。また、詳細は割愛しますが、TEL（テル）という車両にミサイルを乗せて発射することや、潜水艦から発射するというところも行っているというところでは。

まさにこういった新たな脅威の段階になってきているということで、それぞれこの表を見ていただければ分かると思いますが、昨年でいうと、核実験を2回、弾道ミサイルの発射は15回で合計23発となっており、今年でいうと、昨日の発射も入れると、11回、合計14発のミサイル発射が行われています。

次に最近のミサイル発射事案の傾向についてご説明をさせていただきます。

これは今年の3月6日に、スカッドという数百発保有しているミサイルですが、これをほぼ同時に4発、北朝鮮の西海岸の方の東倉里というところから発射し、そのうち3発をほぼ同じような場所、男鹿半島から西に約300～350kmに着水させたという事案です。最近、北朝鮮は発射を成功すると翌日などに映像を流しておりますが、この写真のように4発をほぼ同時に発射するという技術を高めてきているということでは。北朝鮮の発表によると、この訓練には、有事に日本の在日米軍基地を打撃する任務を担当している部隊が参加したということや、複数の米軍基地を攻撃できるというようなことも言っていたというところでは。

次に、今年の5月14日のミサイル発射についてです。こちらに写真がありますが、今年の4月15日に北朝鮮による軍事パレードでいくつか見たこともないミサイルが登場しており、そのうちの一つを発射したのではないかと考えられています。このミサイルの特徴としては、昨日発射したミサイルも非常に高い高度で飛んだということでは、2,000kmを超えた高度に達して800km位飛んだのではないかとされており、ミサイルを発射した翌日には労働新聞でガッツポーズをしている金正恩氏も出てきています。

先ほど、2,000kmを超えた高度とご説明しましたが、これはロフテッド軌道と呼ばれているものです。通常、弾道ミサイルの発射は、ミニマムエナジーという高度の

放物線状による飛ばし方が一番遠くまで飛ばせる最も効率的な打ち上げ方なのですが、北朝鮮は、最近わざとこのようなロフテッド軌道という打ち上げ方をしているということです。このロフテッド軌道はミサイルを高く打ち上げますので、落ちてくるときの角度はきつくなり、速さも速くなりますので、迎撃は非常に難しくなるということです。つまり、本来はもっと遠くに飛ばせるようなミサイルを、あえてこのロフテッド軌道で打ち上げをしているということです。

次に、5月21日のミサイルの発射です。特徴としては、このコールドローンチという潜水艦から発射するときによく使うものですが、発射の筒からポンと飛び出して、その後点火させるというものです。これは結構高度な技術ですが、北朝鮮は既に身に付けているということです。

次は、7月4日のミサイルの発射です。北朝鮮の発表によりますと、昨日のミサイルはこれと同じものを発射したのではないかと考えられています。このときは2,500kmの高度を飛翔しましたので、先程ご説明したロフテッド軌道で、高く飛ばしているということです。これは普通に飛ばすと飛翔距離は5,500kmを越えるということになりますので、ICBM級のミサイルと考えられます。

このICBMとは何かということですが、弾道ミサイルというのは、射程の距離、どれだけ飛ぶかによって大体3つ位に分類されます。

短距離弾道ミサイルはSRBM、中距離弾道ミサイルはIRBM、そして大陸間弾道ミサイルというものをICBMと呼んでおります。ICBMの射程距離は5,500km以上となっております。

この5,500kmとは何なのかという疑問があるのではないかと思います。これは冷戦期に、当時のソ連とアメリカで核兵器の軍縮交渉をした際、一番ヨーロッパに近いソ連の国境からボストンなどがあるアメリカ北東の国境との最短距離が5,500kmだったということで、これを越えるものを大陸間弾道ミサイル、ICBMと定義されております。

北朝鮮は、昨日もそうですが、このICBM、いわゆる火星14型の発射に成功したと発表しており、7月4日のミサイルは、2,802kmまで上昇して933km飛んだということで、アメリカの心臓部を打撃することができるとも言っております。

また、最近北朝鮮は日本を攻撃目標にするというようなことも主張してきています。最初は、今年になってから労働新聞という彼ら労働党の機関誌で言っていたのですが、5月に北朝鮮の外務省の報道官が日本領土内にある米国の侵略的軍事対象だけではないと言っていること、さらに、米国よりも先に日本列島が丸ごと焦土化されかねないという話が出てきているということです。

これまで北朝鮮によるミサイルの発射事例についてご説明いたしましたが、北朝鮮の弾道ミサイル発射の動向としてポイントは2つあると考えています。1つ目は弾道ミサイルの技術的な信頼性が向上しているということと、2つ目は色々なミサイルの撃ち方

を試しているということです。

1つ目のミサイルの信頼性の向上ですが、北朝鮮は人工衛星と称した長距離の弾道ミサイルを過去2回発射し、概ね同じように飛ばすことができているということで、弾道ミサイルの開発全体がより一層進展しているということが言えるかと思えます。

また、人工衛星の打ち上げと弾道ミサイルの発射は、必要となる技術は同じですので、このように人工衛星と称するミサイルを打ち上げるということは、まさに長距離の弾道ミサイルの発射技術が強化されているのではないかということです。

さらに、配備済みの弾道ミサイル、先程のノドンやスカッドなどのミサイルの技術的な信頼を向上させています。具体的には先程ご説明したとおり、昨年9月に3発のミサイルを同じ場所から同時に発射して、同時に同じような場所に着水させていることや、今年の3月にも4発同時に発射するというようなことを行っているということです。これはいずれも1,000km位離れた場所に着水させたということで、配備されているミサイルの技術的な信頼性も向上させていると考えられるということです。

2つ目は、北朝鮮は保有している色々なミサイルについて、撃ち方を変えて発射しているということです。具体的には台車付きでどこにでも移動でき、そこからミサイルを発射することができるTELと呼ばれる車両や潜水艦からの発射を行っています。TELからの発射は、車両で移動して隠れながら発射する時にだけ出てくることができまので、どこから発射するのかが非常に分かりづらいですし、潜水艦は海中なのでさらに情報が少なく、見つかりにくいということになります。

昔は固定式の台、イメージとしては、種子島宇宙センターの発射台のような所から弾道ミサイルを発射していましたので、どこから発射されているかが分かったのですが、どこからでも撃てるということになると、非常に見つけにくいという特徴があります。このようにまさに様々な場所から発射しているということです。

また、先程ご説明したとおり、ロフテッド軌道というミサイルの打ち上げ方は、2,000kmを超えた高度から非常にきつい角度で速く落ちて来ますので、迎撃しづらいということです。

以上が北朝鮮の弾道ミサイル発射の動向で、非常に能力を上げてきているということをご説明させていただきました。

次に核実験、核開発についてですが、北朝鮮は昨年の9月に5回目の核実験を行い、核開発の実験が成功裏に行われたと言っております。

現在核を保有している他の国が何回核実験をしたかというのがこの図です。例えばイギリスでは5回で大体核実験は終わったということです。北朝鮮も核兵器の小型化、弾頭化の実現に至った可能性があるのではないかと考えられるということです。

北朝鮮の核・ミサイル開発の今後の見通しですが、経済建設と核武力建設の並進路線を進めるということ去年の党大会でも言っておりますし、また、大陸間弾道ミサイルの試験も最終段階に至ったということで、昨日の発射も7月4日の発射もそうですが、

こういうものを引き続き行っております。このような状況を踏まえると、北朝鮮は今後も核・ミサイル開発を行っていくのではないかと考えられ、我々はそれに立ち向かわなければならないということになります。その手段には、もちろん外交の手段等もありますが、色々な手段を使って北朝鮮のミサイル開発、核開発を止めさせようということで、これまで様々な取組みをしてきているということです。

その中で、仮に北朝鮮のミサイルが我が国に飛来した場合に、防衛省・自衛隊が導入している弾道ミサイル防衛というシステムにより、そのミサイルを迎撃するということとなります。

それでは、この弾道ミサイル防衛システムの概要につきまして、簡単にご説明させていただきます。

先ず弾道ミサイルとは何かというと、先程ご説明したとおり放物線で飛翔します。ロケットエンジンで飛ばして放物線を描いていくというものです。これは物を遠くに飛ばすのに非常に適しているものです。更に言えば、弾道ミサイルの発射は基本的に高度な技術はあまり必要ではなくローテクなものですので、北朝鮮は弾道ミサイルを一生懸命開発しているのでないかということです。

また、弾道ミサイルは、トマホークのような巡航ミサイルとは別のものです。巡航ミサイルは、ジェットエンジンで地平線に真っ直ぐ向かっていくようなものです。これは航空機と同じ様な原理で、非常にハイテクな技術であり、飛行中に飛ばす場所、目的を変えながら攻撃目標にぶつけることができるという特徴があります。

他方で弾道ミサイルのポイントは、速度が非常に速く、マッハ3とか、もの凄く速い速度で落ちてきます。速度が速いので短い時間、例えば北朝鮮が射程1,000km位の弾道ミサイルを発射すると10分位で日本に到達するということになります。また、弾道ミサイルは大気圏外に出て放物線を描いて飛びますので、到達する高度は高いということと、弾頭は非常に小さいということです。弾道ミサイルの迎撃は、簡単に言えば野球のピッチャーの速球に対して速球をぶつけるというように、小さくて速いものに高速でぶつけないといけないということです。そのため、非常に極めて精度の高い迎撃システムが必要ということになります。

これは我が国の弾道ミサイル防衛構想の図です。海上自衛隊のイージス艦がこの高いところ、上層で迎撃するということ、その上層で迎撃できなかった場合には、大気圏内で落下する直前に航空自衛隊のペトリオット、PAC-3で迎撃するという多層防衛になっています。

弾道ミサイルが発射された場合には、先ず航空自衛隊のレーダーや海上自衛隊のイージス艦のレーダーで、飛来するミサイルを追尾します。例えば昨日の夜発表した北海道奥尻島から約150kmの我が国の排他的経済水域内に落下したという情報は、レーダーで追尾しているので分かるということです。

このようにレーダーで追尾し、上層でイージス艦のミサイルで迎撃するということ、

下層ではPAC-3が対応するというような構造になっております。

具体的にご説明しますと、イージス艦は、大気圏外、宇宙空間でミサイルを迎撃するというもので、ミサイルを追尾するレーダーと発射機から構成され、海上からレーダーで弾道ミサイルを追尾、探知してSM-3というミサイルで迎撃します。現在のシステムですと、イージス艦が3隻あると日本全体を防護できると考えております。

PAC-3は、車力分屯基地にも配備されておりますが、大気圏内において迎撃するシステムで、高度10数kmにおいて、まさに落下する最終段階にある弾道ミサイルを迎撃するというものです。1つの高射隊で半径数10kmの範囲を防護し、事態に応じて必要な場所に機動的に移動・展開するというものです。

弾道ミサイル防衛に対応するイージス艦は現在4隻で、佐世保に2隻、舞鶴に1隻、横須賀に1隻あります。また、PAC-3は全国の6個高射群にあり、全てにPAC-3を配備し、弾道ミサイルを追尾するレーダーサイトも全国各地にあります。

青森県でいえば、車力にはPAC-3を配備しており、米軍のXバンドレーダーが配備されています。また、大湊には飛来するミサイルを探知して追尾するカメラレーダーという大きなレーダーがあるということです。

このようなシステムを構築しておりますが、北朝鮮のミサイル開発の進展というのは非常に早くなってきているということで、我々としては、現在、弾道ミサイル防衛能力を強化していこうとしております。

これは、我が国全域を防護できる能力を強化し、即応体制や同時に対処する能力の構築と、継続的に北朝鮮がミサイルを発射しているという状況ですので、継続的な対処能力というものを構築していかなければならないということです。

まず、イージス艦は現在4隻ですが、これを8隻に増やすということ、更に、発射するミサイルの能力も向上させようと考えております。これにより、今は弾道ミサイルの対処にイージス艦が3隻必要ですが、今後は2隻で日本全域を守れるようになると考えております。

また、レーダーの能力を強化することや、PAC-3の防護範囲を今までの大体2倍以上に広げようとしています。

イージス艦に搭載するミサイル能力の強化についてですが、これはきつい角度で落ちてくるロフテッド軌道への対処や、弾道ミサイルの同時発射にも対応できるように、SM-3ブロックIIAという能力向上型のミサイルをアメリカと日本で共同開発しているというものです。

このような自衛隊の取組みも重要ですが、米軍もBMDの能力を保有していますので、アメリカとも協力をしながら、この厳しい安全保障環境、北朝鮮の脅威等に対応していく必要があります。

弾道ミサイルの発射時には、アメリカからSEWというミサイルのアラート情報ももらい、アメリカが日本に配備しているTPY-2レーダーや、イージス艦を用いて収集

した情報を共有しており、アメリカと協力しながら対処能力を高めているということです。

また、TPY-2レーダーは、ここ車力と経ヶ岬に配備されており、イージス艦は今横須賀に7隻、さらに嘉手納基地にはPAC-3が配備されておりますので、このようなアメリカが保有する弾道ミサイル防衛のアセットと緊密に協力して、我が国の防衛に万全を期していこうと考えております。

更に、より能力を高めるためにはどうすればいいのかということですが、アメリカでは新しいミサイル防衛アセットを導入しております。

これは、イージス・アショアというもので、イージス艦のミサイルを発射する部分とレーダーを地上に設置するというものです。これを今ルーマニアに配備しており、今後はポーランドに配備しようとしています。

このイージス・アショアや、TPY-2レーダーに発射装置が付いているTHAAD（サード）をアメリカは保有しておりますので、我々が能力強化を考える上で、こういうものも研究していかなければならないのではないかと考えているところです。

最後になりますが、最近PAC-3の展開訓練をしております。これは、戦術技能の向上と国民の安全・安心感の醸成ということで、今年、小牧基地から始めまして、最近では仙台駐屯地で訓練を行っているところです。

このように自衛隊の弾道ミサイルの対応姿勢を見せ、日米が協力して弾道ミサイル防衛の能力を強化し、北朝鮮の弾道ミサイル開発に対抗していくということです。まさに防衛省・自衛隊が米軍とも協力しながら一丸となって対応しているということで、皆様のご理解等をお願いできればと思っております。これで説明を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

（司会）

ありがとうございました。

続きまして田中内閣参事官、よろしく願いいたします。

（田中内閣参事官）

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました内閣官房で事態対処・危機管理を担当しております参事官の田中です。

本日はJアラートによる弾道ミサイル情報の伝達についてご説明させていただきます。

最近の北朝鮮情勢の関係で、Jアラートとは何か、ミサイルが来たらどうしたらいいのか、或いはミサイルが飛んだというニュースが流れるのにJアラートが鳴らなかったのではないかと色々なご質問をいただいております。今回は、そういったことも含めてご説明をさせていただきたいと思っております。

本日ご説明させていただく内容として、まずはJアラートとは何かということ、弾道ミサイル落下時にどう行動したらいいのかということ、弾道ミサイルを想定した住民避難訓練についてご説明をさせていただきたいと思います。

まず、Jアラートとは何かということですが、一言でご説明しますと緊急情報を国の方から瞬時に皆さんにお伝えさせていただく仕組みです。

緊急情報とは何かということですが、例として、弾道ミサイルの情報や航空攻撃情報、あとはゲリラや特殊部隊の攻撃、大規模テロ、自然災害に関して津波警報や緊急地震速報といったものがあります。こういう情報を国の方から人工衛星や地上の回線を使いまして市町村の役場や携帯電話会社の方に情報をお知らせいたします。

これを受けた市町村の防災行政無線が、連動して起動しまして屋外スピーカーから情報がお知らせされる、或いは携帯電話会社からの情報として、エリアメールがドコモから、緊急速報メールがソフトバンクやauから自動で皆様にお知らせをされる、こういったシステムとなっております。これがJアラートというものです。

実際に弾道ミサイルが発射されたというときにどのような情報がお知らせされるかということですが、まず一番大事なポイントとしては、このJアラートでは、弾道ミサイルが日本の領土・領海に落下する可能性があるとか、或いは領土・領海を通過する可能性があるという場合に使用いたしますので、日本の領土・領海に落下する可能性がなさそうな場合や、領土・領海の上空を通過する可能性がないといった場合には、このJアラートは使用いたしません。

ただ昨夜もありましたが日本の排他的経済水域、EEZの中にミサイルが落下する可能性がある場合、Jアラートは使用しませんが、船舶や航空機に対しては迅速に警報を発出することにしております。

弾道ミサイルが発射されて、日本の領土・領海に来そうだといった場合には、まず、ミサイルが発射されたという情報をお知らせいたします。その後は、このミサイルがどういう状況になっているかによってお知らせする内容が変わります。

ミサイルが日本の領土・領海に落下する可能性がある、或いは上空を通過する、或いは日本の領海外の海域に落下するといったケースがありますが、まず1つ目の日本の領土・領海に落下する可能性があるという場合は、直ちに避難することの呼びかけとなり、直ちに避難してくださいといったお知らせをいたします。

このお知らせの後、実際に落下したということになりましたら、落下場所などの情報をお知らせいたします。

その内容は、「ミサイル落下、ミサイルが〇〇地方に落下した可能性があります」という内容で、この〇〇地方というのは東北地方とか、関東地方とかそういう形でお知らせします。

こういったミサイル落下情報の後、追加情報ということで、屋内避難を解除するような情報や引き続き屋内避難をしていただくとか、或いは別の地域に避難していただく

いった情報をお知らせすることになります。

2つ目の日本の上空を通過するという場合は、ミサイルが上空を通過したあとに、ミサイルが上空を通過しましたという情報をお知らせすることになります。

そして3つ目の日本の領海外の海域に落下した場合は、落下場所などについての情報ということで、先程ミサイルが〇〇海に落下した模様ですといった形でお知らせをすることになります。

このように上空を通過した場合や、日本の領海外に落下した場合の情報をお知らせした後は、さらに追加情報としてJアラートで何かお知らせをすることとは想定しておりませんので、その後の政府の情報は、テレビやラジオなどで確認をしていただきたいと思えます。

また、もし不審な物を発見した場合には、決して近寄らず、すぐに警察や消防、海上保安庁にご連絡をいただければと思えます。

Jアラートでは、先程一番大事なポイントということで日本の領土・領海に落ちてくる可能性がある場合や上空を通過する可能性がある場合に発出することをご説明しましたが、実際にJアラートを使用する場合には、ある程度、地域の絞り込みをしてからお知らせをしますので、そもそも九州とか沖縄にミサイルが来そうだというときには、こちらの青森、東北や北海道の方では使用されません。Jアラートが使用されるというときには、ある程度地域を絞り込んでお知らせをすることをご理解いただければと思えます。

参考までに実際にJアラートが使用されたケースとして、約1年半前の平成28年2月7日、朝9時半頃に北朝鮮が弾道ミサイルを南に向かって1発発射し、沖縄の上空を通過したという事案がありました。

このときは、9時34分にミサイル発射情報として、Jアラートによりお知らせをし、その後、9時42分にミサイルが通過したということで、「通過情報、通過情報、先程、この地域の上空を通過した模様です」と、こういった情報をJアラートでお知らせをしております。

このJアラートを実際に使用した場合に、どのように通知されるのかということで、実際の音を聞いていただくことにしたいと思います。

まずはこちら国民保護のサイレン音ということで、防災行政無線などから流れるものはこちらの音です。(サイレン音)

これが防災行政無線から聞こえてくる約15秒位の音になります。もう1つは、緊急速報メールということで、携帯電話ですとかスマートフォンの方から流れるものです。(緊急速報メール受信音)

こちらの緊急速報メールの方は、津波や火山情報の関係で、もしかするとたまにお聞きになることもあるかと思えますが、そういったものと同じ音が流れます。この国民保護の関係の防災行政無線の音と携帯やスマートフォンで聞こえる音とは少し違います

が、どちらかの音が聞こえたら、Jアラートで緊急情報がお知らせされているということに気付いていただければと思います。

続きまして弾道ミサイルが落下した際、どのように行動したらいいのかということです。

内閣官房から「弾道ミサイル落下時の行動について」ということで、皆様にお知らせしている内容になりますが、先程のJアラートを通じて、弾道ミサイルについてのお知らせを受け取られた際には、速やかな避難行動と、正確かつ迅速な情報収集ということがまず大事なことであり、更に行政からの指示に従って落ち着いて行動していただきたいと思います。

それでは具体的にどのような行動するのかですが、例えば、最初にJアラートが作動し、弾道ミサイル発射情報のお知らせを受け取った場合についてです。このお知らせが届いた場合には、ミサイルが着弾した際の暴風や破片などによる被害を避ける、身を守るという行動が非常に大事となります。もし屋外にいて、近くに頑丈な建物、コンクリート構造の建物や地下があるということでしたら、そこに避難をしていただきたいと思います。

もし外にいて建物が近くにない場合は、物陰に身を隠すか、或いは地面に伏せて頭を守るということをしていただきたいと思います。

それからコンクリートの建物ではなくても自宅や屋内にいる場合には、窓から離れるか窓のない部屋に移動するという形で身を守っていただくよう、行動をしていただきたいと考えています。

色々ご質問をいただくことがありますので、我々内閣官房の方で弾道ミサイル落下時の行動についてのQ&Aをまとめております。様々なケースがあるかと思いますが、ケースに応じてどのような行動が必要なのかをまとめたものです。その中でも特にご説明をさせていただきたいことが2つあります。

まず1つ目として、お持ちの携帯電話・スマートフォンがJアラート作動時にエリアメール、緊急速報メールを受信するかどうかということです。これは、消防庁の方で受信可能な機種かどうかの確認方法をホームページで公表しております。

基本的に最近の携帯電話・スマートフォンであれば、受信できるようになっておりますが一部受信できないものがあるようです。大手のドコモ、ソフトバンク、auではほぼ対応できるようになっているようですが、念のため、携帯電話会社に聞いていただくか、消防庁のホームページにも載っておりますので、ご確認いただければと思います。

それから、2つ目として、ミサイルが発射された場合にどのように行動したらいいのかということです。たまに「避難する際に、避難施設として都道府県知事が指定している頑丈な建物や地下施設に避難しなければならないのか。」というご質問をされることもあるのですが、10分程度でミサイルが飛来してくる場合もありますので、避難施設として指定されているかどうかに関わらず、近くの頑丈な建物や地下施設に避難をして

いただきたいと思います。

つがる市で言いますと、小中学校や公民館などの38施設が避難施設として指定されております。小中学校は、ある程度コンクリート造りになっていると思いますので、そういったところも参考にしていただければと思いますが、必ずしも指定されている避難施設に避難しなければならないということではありませんので、近くの建物に避難していただければと思います。

このほか、自動車の車内にいる場合はどうしたらいいかということも聞かれることがあります。この場合は、車を停めて頑丈な建物や地下に避難をしていただく、或いは避難できるような建物や地下が近くにない場合は、車から離れて地面に伏せて頭を守っていただくといった行動をお願いしたいと思います。

次に、ミサイルが落下したという情報をお知らせすることがあり得ます。そのような場合はどう行動したらいいかということですが、その際は当然続報をお知らせしますので、引き続き屋内に避難をしていただくことはもちろんのこと、弾頭の種類に応じて被害の様相や対応が大きく異なりますので、まず情報収集をしっかりといただくということと、もし近くにミサイルが着弾したという場合、弾頭の種類によって被害の及ぶ範囲が色々異なりますが、基本的な対応として、屋外にいる場合には口と鼻をハンカチで覆いながら現場から直ちに離れ、密閉性の高い屋内または風上に避難をしていただきたいと思います。屋内にいる場合は、換気扇を止め、窓を閉め、目張りをして室内を密閉していただくといったご対応をしていただきたいと思います。

今ご説明させていただいた内容は、内閣官房の国民保護ポータルサイトにも載せておりますので、お時間があるときにご覧いただければと思います。

次に弾道ミサイルを想定した住民避難訓練についてご説明いたします。

昨今の状況を踏まえ、弾道ミサイルが我が国に落下する可能性がある場合にどのような行動が必要なのかをより一層皆さんにご理解をしていただくということが非常に大事なことと考えておりますので、我々から自治体に是非訓練をしていただくようにと呼びかけをさせていただいております。

このミサイルを想定した住民避難訓練は、今年の3月に秋田県の男鹿市で初めて実施されております。

この時は、ある程度シナリオといいますか、こういうふうにして下さいという話をし、Jアラート、防災行政無線でお知らせして、近くの建物や小学校の体育館に避難していただくといった形で訓練を行っていただきました。

その後、消防庁を通じて、我々の方から更にお願したのは、より実際に近い場面を想定した訓練のご検討をしていただきたいと思いますということです。例えば、屋内避難先を予め決めないとか、屋内避難が間に合わない場合はどうするのかとか、自動車を運転中であればどうするかとか、色々なケースを想定した上で、工夫しながら避難訓練をしていただくようお願いをしたところです。

これまでの避難訓練の実施状況ですが、国と地方の共同訓練や地方単独訓練を色々とおこなっていただいているところです。

これは避難訓練の例ということで、山口県阿武町における訓練ですが、このときは、工夫の一つとして参加者ごとの避難先は決めずに、参加者が具体的な避難先をその場で判断するということが、自宅の方はそのまま自宅に留まるか、自宅から出るかを判断して行動してもらい、小学校や役場、体育センターなどに避難をしていただいております。

それから山形県酒田市ですが、こちらのときも予め参加者ごとの避難先は決めずに、具体的な避難先を参加者にその場で判断をしていただいたということで、こちらコミュニティセンターや保育園、小学校、介護施設といった場所に避難をしていただいております。屋内避難が間に合わないと判断された場合、自分の身を守る、頭を守るということで物陰に隠れて身を伏せる、或いは橋の下のような所に隠れるといったことをしていただいた方もおられます。

それから新潟県燕市ですが、このときも予め避難先は決めずに具体的な避難先はその場で判断することとし、屋内避難が間に合わない方については物陰に身を隠すなどの行動をとっていただいたということです。田畑が多い地区では、近くに頑丈な建物がないということも十分に考えられますので、そういったときのことを想定して訓練をしていただきました。参加者の皆さんは、灌漑用の側溝の下や、コンクリート製の橋の下、円筒形のコンクリートの中に隠れるとか、或いは農機具小屋、屋内に退避するといった形でそれぞれ皆さんが判断、工夫をして避難をしていただいております。

それから富山県高岡市ですが、こちらは高岡市の駅前に地下街がありますので、ここに実際に避難するという訓練をしていただいたということが訓練のポイントとなります。

このように、それぞれの自治体において色々とおこなっていただきながら訓練を実施していただいております。

やはり訓練は非常に大事なことでありまして、色々とお知らせのご説明の中で、こういった情報が流れますとか、こういった情報が流れたらこのような行動していただきたいとお伝えしているところですが、実際に訓練をしていただくと、それがよりご理解いただけ、また、より身に付くと思いますので、是非とも積極的なご参加をお願いしたいと思っております。

私からの説明は以上となります。どうもありがとうございました。

(司会)

ありがとうございました。

続きまして栗秋車力分屯基地司令、よろしくお願いたします。

(栗秋司令)

第21高射隊長を兼ねて、車力分屯基地司令の栗秋です。本日はこのような機会をいただきまして、誠にありがとうございます。本日は航空自衛隊の概要と車力における日米連携についてお話をさせていただきます。

こちらスクリーンの真ん中にありますエンブレムは、航空自衛隊車力分屯基地と米軍車力通信所が共同で使っているエンブレムです。上の3つが車力にある三個部隊。そして下が米軍車力通信所のマークです。まずは広報活動を見ていただきます。

～動画～

ここからはスライドでご説明をいたします。まずは我が国周辺の空についてです。

地球は約30%の陸地しかありません。その他の70%は海洋、海になります。そして空は100%です。島国である我が国は領土、領海、そしてEEZで約98%を占めています。我が国の領土・領海・EEZ、その100%は航空宇宙領域となります。

我が国の場合、世界とは空と海で繋がっています。そして私たちの大切な国民生活に必要な、ヒト・モノというのは必ず空または海を経由して往来しています。

国際貨物における取引状況ですが、海上輸送と航空輸送の割合を示しています。こちらの重量ベースで比較すると、ほとんどが海上輸送であり、航空輸送は0.3%です。一方で金額ベースにすると約25%が航空輸送になります。つまり高価格、高いものは航空輸送で運ばれています。更に人の往来になると98%、ほぼ100%が航空輸送となっています。

我々が平和で豊かな暮らしを送るためには、空と海を安定的に利用できる状態をつねに保つ必要があります。特に遮るものがない空の安全を確保することは、我が国の平和と安全のみならずアジア太平洋地域の平和と安定を実現し、国際社会の平和と安定及び繁栄を確保することに繋がります。

領土と領海の上全てが領空になります。領空には、当然自分たちの国の主権が及びますが、一方で領空以外の空においては全て公海上空ということで、国際公共財として位置付けられています。

公海上空は、国際法上いずれの国の管理下にもなく、その飛行は自由です。しかしながら、平成25年11月、中国政府は公海上空に防空識別区を設定した上、自国の主権が及ぶような声明を発表しました。これに対して日本のみならず米国を始め国際社会から強い懸念が示されています。

そして領空主権についてですが、海と空では領域に関する考え方が違います。

領海では、沿岸国の平和、秩序及び安全を害することがなければ、他国の船舶でも沿岸国の領海を通航することができます。いわゆる、無害通航権です。

一方で領空は、そのような権利は国際法上認められておりません。各国が完全かつ、排他的な主権を有します。航空機が、ある国の領空の内側を飛行するためにはその国の許可を得ることが必要となります。その理由としては、航空機は地上のあらゆる障害を乗り越えて、高速で移動可能であり、短時間で領土への到達が可能であるのみならず、

多様な兵器が搭載されている可能性を否定することができないため、攻撃された場合は甚大な被害になります。

領空を守ることは、国民の生命・身体・財産の安全の確保に直結していると言うことができ、領空に接近する不審な航空機に対しては、領空侵犯を未然に防止するため、厳正に対処することが重要になります。これが領空侵犯に対する措置であり、諸外国も厳正に実施しています。

現在の我が国周辺では東シナ海、この赤い線につきましては、活発化している中国の航空機の活動です。日本周辺の黄色い線は、ロシアの爆撃機等の活動です。また、朝鮮半島では、弾道ミサイル及び核開発等の活動が継続されています。

ご覧の通り、我が国周辺の空においては、各国の軍事活動が活発化していることをご確認いただけるかと思えます。

こちらは、航空自衛隊が実施しています対領空侵犯措置の実施回数のグラフになります。昭和33年に始まって以来、現在まで継続して実施しておりますが、昨年は特に顕著で1,168回対応しています。特に南西航空方面隊、沖縄での緊急発進回数が著しく増加しています。

続いて、航空防衛力の意義についてご説明いたします。航空防衛力とは、航空機、レーダー、ミサイル等を主体とした国家が保有する航空に関する防衛力を指します。

航空防衛力の特徴は大きく6つあります。高い即応性、機動性、柔軟性、多様性、突破力、生存性です。平素から事態対処に至るまで迅速かつ確実に対応することが可能です。更に優れた監視能力、優れた指揮統制通信能力、精密な攻撃力、航空防衛力は空だけでなく、陸・海の領域に対しても提供・発揮することが可能です。

一方で、航空防衛力の短所としては天象・気象の影響を受けやすく、地上では脆弱であり、防衛力の増勢には長期間を有します。特に装備品の取得については、F-15のライセンス生産を例に挙げますと、機種選定の開始から任務開始までに約10年の歳月を要しました。更に、人材育成という観点からは、一例として、戦闘機操縦者が編隊長になるまでの期間は約8年を有します。

続いて航空防衛力の意義についてですが、一言で言いますと、航空防衛力は領域を跨いだ統合運用を牽引できると言えます。これは図に示しますように、例えば航空防衛力は陸・海・空・宇宙といった異なる領域にある各種装備品を接続し、戦闘情報ネットワークを構築することが可能になります。

更に、我が国におきましては、地上における警察力や海における海上保安庁に相当する空の警察力が存在していません。そのため、航空自衛隊は平時から有事に至るまで一貫して我が国の空の平和と安全を担う唯一の存在であると言えます。

次に、航空自衛隊の組織・編成について簡単にご説明いたします。

航空自衛隊は、機能別の組織をとっており、戦闘機部隊、航空警戒管制部隊及び地対空誘導弾部隊を有する防空・弾道ミサイル防衛等を実施する航空総隊、そして、航空輸

送、航空管制、航空気象などの航空作戦を支援する航空支援集団、基礎教育・術科教育・飛行教育等を実施する航空教育集団、その他航空開発実験集団、補給本部などがあります。

航空総隊について再度ご説明いたします。

航空総隊は北部・中部・西部・南西の4つの方面隊に区分されており、それぞれが戦闘機部隊、航空警戒管制部隊、地对空誘導弾部隊を有しております。

戦闘機部隊は、12個飛行隊が全国7つの基地に配置されており、こちらの青森では三沢にあります。

次に航空警戒管制部隊は、全国4ヶ所の防空司令所、三沢・入間・春日・那覇にあります。それと28ヶ所のレーダーで我が国とその周辺の上空を24時間体制で監視しています。

地对空誘導弾部隊は、我が国の政治経済等の重要地域の防空を行うため、全国に6個高射群が配置されています。

高射群は、ペトリオットと呼ばれる地对空誘導弾を使用していますが、このうち、弾道ミサイルへの対応が可能なものが、PAC-3と呼ばれています。

青枠で囲まれている高射群は所属する4つの高射隊全てがPAC-3を保有しているものです。緑色の高射群につきましては、一部の高射隊がPAC-3を保有しています。ご覧のように、全ての高射群において弾道ミサイルへの対応が可能となっております。

その他に、救難部隊として千歳から那覇までで10個基地に配備されています。ヘリコプターで行う空輸部隊として、三沢・入間・春日・那覇があります。

次に空自の活動についてご説明いたします。

まず始めに、周辺空域における警戒監視です。航空自衛隊は先程ご説明しました全国28ヶ所のレーダーサイトを運用して、我が国のほぼ全周において24時間365日、警戒監視活動を行っています。

対領空侵犯措置につきましては、昭和33年の任務開始以来、全国7ヶ所の基地を基盤に、間断なく実施してまいりました。スライドの左に示すグラフは、過去10年間のスクランブル、緊急発進の回数を表しています。黄色がロシア機、赤が中国機です。特に平成22年度以降、中国機に対するスクランブル回数が増加しています。

次に弾道ミサイル防衛です。我が国の弾道ミサイル防衛は、先程ご説明もありませんでしたが、イージス艦による上層での迎撃と、ペトリオットPAC-3による下層での迎撃を、自動警戒管制システム・JADGEにより連携させて効果的に迎撃を行う多層防衛を基本としています。

それでは弾道ミサイルについて、ビデオをご覧ください。

～動画～

続いて車力における日米連携についてご説明いたします。

こちらは岩木山から撮ったつがるの景色ですが、車力分屯基地はこの十三湖側の3ヶ所に分散して配置されています。

車力には、航空総隊の北部航空方面隊の下にある第6高射群、その中の第21、第22高射隊があります。そして大臣直轄部隊である第4移動通信隊もありまして、3個部隊があり、航空自衛隊の中でも一番大きな分屯基地の一つです。更に、米陸軍の米軍車力通信所が隣接しておりますので、かなり大きな基地となっています。

沿革としては、昭和55年にナイキ部隊として基地が開設されました。平成3年にナイキからペトリオットに換装し、このときに部隊が2つになっています。現在は3個部隊が所在し、先程もお話ししましたが、米軍車力通信所が隣接しています。

こちらは、今年のJRのキャンペーンポスターで、高山稲荷神社と帆船が載っています。何が言いたいかといいますと、チェスボロー号座礁遭難救助についてです。

車力は他に例のない成功例だとよく言われており、これは車力では明治22年に、米国の貿易船チェスボロー号の遭難を救助したことをきっかけに、平成2年から水泳駅伝チェスボローカップを開催しており、また平成5年には米国メイン州バス市との姉妹都市を結んで、毎年中学生を中心としたホームステイによる総合プログラムを行っているという、日米協力の基盤が既にあったからだと思います。

車力通信所の沿革ですが、車力と経ヶ岬に配置されるTPY-2レーダーは世界で5ヶ所に展開している中の2つとなります。洋上のイージス艦と併せて常時運用されています。発射された弾道ミサイルを早期に探知して追尾し、正確な飛翔位置情報を指揮統制システムに送ることで、ミッドコース及びターミナル段階におけるミサイル防衛システムの迎撃率を向上させる役割を果たしています。併せて、日本にも情報共有されることから、我が国の防衛にも貢献しています。昨年10月には、米軍車力通信所開設の10周年記念行事を執り行いました。

そもそもアメリカはどのように弾道ミサイル対処を行うのでしょうか。

2017年4月に出された「ミサイルディフェンス2020」によりますと、米国は北朝鮮・イランなどからのホームランドディフェンス、本土防衛のために世界中にセンサーを配置し、ICBMに対してGBIと呼ばれるミサイルで迎撃する体制を構築しています。その前方センサーがTPY-2レーダーになります。センサーの他には、日本には横須賀にイージス艦、嘉手納にPAC-3を配備しています。アメリカにとって日本というのは、最も重要な国際BMDパートナーの1つになります。その日米協力は、米国が段階的適用アプローチ、PAAを追求するうえで際立った事例となりました。

車力は、日米BMDの象徴であると言えます。そのため、車力の名前は世界中のミリタリーの中で有名であり、車力村がつがる市となり、その名前がなくなった今も車力の名前を残してくれています。

車力における日米連携ですが、直通回線及び通訳を配置した調整窓口を常設しております。連絡及び情報共有手段の確保をするとともに、米軍車力通信所の開設以来、週1

回の定例会を開催し情報交換及び交流の場としています。また、行事などには相互に出席するほか、行事の開催を支援するなど非常に良好な関係にあります。

これらの交流に加えて、米軍人による車力分屯基地における児童向けの英会話教室の実施や、地域行事への共同参加などにより、空自と車力通信所という枠組みのみならず、隊員や家族、個人での信頼関係も醸成されており、今後もこの良好な関係を発展させていきたいと考えています。

最近では、リーダーシップディベロップメントプログラムという米軍と共同で指揮能力向上訓練を実施しています。こちらが、リーダーシップディベロップメントプログラムの様子です。基地の隊員全員が英語を喋れるわけではありませんが、相互に交流を重ねることで通じ合えるようになってきています。

各種行事への参加については、日米で揃って参加しています。常に車力通信所の指揮官の横に私が居るようにして、地元の方のご意見は私を介して必ず米側に伝えるように心掛けています。

こちらは昨年参加したつがる市馬市の写真です。基地協力会、あと米軍関係者、そして自衛隊員で参加いたしました。仮装につきましては自衛隊がスーパーマリオ、米軍がポケモンのキャラクターに仮装してパレードしました。今年も日米で参加して、総合優勝を目指します。

こちらは昨年10月に車力分屯基地において実施されました米軍車力通信所10周年行事の様子です。ミサイル防衛庁長官シリング中将の他、北部航空警戒管制団司令であり、第14代車力分屯基地司令であられる柿原将補、当時の防衛副長官であられました故木村太郎衆議院議員も来られまして、また当時からつがる市長である福島市長も参加されました。円満な設立と円滑な運用に貢献された多くの要人をお迎えし、盛大に10周年記念行事を執り行うことができました。

こちらは、昨年10月に実施した基地餅つき大会です。つがる市総務部長、それから議長、協力会会長、家族会会長を始めとした自治体関係者及び協力団体の方に参加していただいております。

餅つき終了後には、米軍及び基地准曹会合同で老人福祉施設を慰問しております。このときの様子は、NHKのアップルワイドでも放映されました。また、更に雑誌「丸」の4月号にも掲載されています。

こちらは、今年1月のつがる市消防団出初め式と、6月に行われました観閲式の様子になります。こちら米軍の指揮官と一緒に参加して、地元の消防団の方々と交流しました。

こちらは6月に実施された米軍指揮官交代式の写真です。メトカフ少佐からチャベス大尉に代わっています。

こちらは、基地開庁37周年記念行事のときの様子です。雨のため来場者が伸び悩みましたが、多数の来場者を迎えることができました。ありがとうございます。今年は、

子どもが楽しめる基地祭をテーマに制服の試着や子どもゲームの他に、ペトリオット子ども指揮官、ペットボトルロケット、スタンプラリー、ファンシードリルを加え、子どもから大人まで楽しんでいただきました。米軍には、こちらホットドッグとハンバーガーの店を出店して貰い盛況でした。

それでは自衛隊の紹介でファンシードリルのダイジェスト版をご覧ください。

～動画～

また来年も7月にありますので、是非御来場ください。

その他、基地及び個人で積極的に津軽地方における各種イベントに参加しています。特に8月は各種イベントが盛り沢山です。基地としては、8月6日のチェスボローカップが地元根付いたイベントということで、積極的に支援・参加します。

各ねぶた祭りにおきましては、各隊員個人が地域の住民として協力して参加し、青森の短い夏をしっかりと満喫しています。こちらは去年米軍が引っ張りました。その他積極的に部隊研修や、視察及び体験入隊の受入れ、広報活動も実施し、地域住民の方々と地域共栄に精励しております。

車力においては、チェスボロー号遭難・救助に始まる日米交流の地盤を基に、地元・地域の方々と共に車力分屯基地を育ててきた歴史があります。その上で、新たな脅威である弾道ミサイル防衛のために、米軍のXバンドレーダーが配備され、これまで日本の防衛と日米同盟強化のためにご理解とご協力を得てきています。

車力において、特に大きな問題等なく進んできていますのは、本当に地元・地域の方々のご理解とご協力があってのことです。それを忘れず、航空自衛隊と米陸軍とで協力して、車力において任務を遂行していきます。引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

それでは最後にビデオを御覧ください。

～動画～

ご清聴ありがとうございました。これで終わります。

【質疑応答】

(司会)

ありがとうございました。

それでは、ただ今から質疑応答に入らせていただきます。それでは御質問のある方は挙手をお願いします。

(質問者)

今日はどうも北朝鮮情勢と弾道ミサイル防衛についてお話ありがとうございました。質問ですが、日米安全保障体制が維持できない場合でもJアラートは機能するのでしょうか。また、防衛費の件ですが、GDP比で1%ということで現在日米安全保障と並行で日本の防衛を維持しているのですけれども、もし日米安全保障が維持できなくなるよ

うな状況があった場合、GDPの何%位の防衛費が必要となるのでしょうか。

(田中内閣参事官)

ご質問ありがとうございます。日米安全保障体制を維持できない状況が私にとってイメージできないのですが、いずれにしても弾道ミサイル情報等の緊急情報を掴んだ場合には、Jアラートのシステムにより、日本国政府としてお知らせをするということですので、その点をご理解いただければと思います。

(飯島防衛政策企画官)

防衛費についてですが、GDP比1%以内という政府方針はもうなくなっており、現在は結果的に1%に近い数字になっているということです。また、アメリカとの関係ですが、我が国の防衛は日米安保を前提に防衛力を構築しております。例えば、アメリカは持っているが日本は持ってない装備品、それを全て日本が買うということになると、計算したことはないのですが、膨大なお金が掛かるのではないかと思います。我が国の防衛というのは、やはりアメリカときちんと連携して行っていくということに尽きるのではないかと考えています。

(司会)

それでは誠に申し訳ございませんが、お時間となりましたのでこれで質疑応答を終了させていただきます。

本日は、ご清聴ありがとうございました。